

【教員座談会】

生徒の心に火をつけたい。

日本を代表する自然科学の研究施設や、国立大学の見学、国内最大級の天体観測会のサポートなど、

履正社では多種多様な探究的プログラムを推進しています。

本年度より本校の入試科目に追加される社会科の先生たちは、探究をどのように捉え、
どんな生徒に入学してほしいと考えているのか。座談会形式で話し合ってもらいました。

僕たちと、
「歴史で学ぶ」を
やりましょう！



社会科

河本健斗 先生

生徒たちが
予想以上に
面白いんです。



社会科

小林亮介 先生

各教科の中でこそ
探究学習を
盛り込めたら。



社会科

和田智博 先生



①京都大学岡山天文台、JAXA 筑波宇宙科学センター(茨城県)、京都大学白浜水族館(和歌山県)、京都大学芦生研究林、SPRING-8(兵庫県)などの公開研究施設を見学体験するサイエンスツアーは、「学んだことが何につながるのか」という目的意識を早くから持つことが狙いです

②「国立大学キャンパスツアー」では、東京大学、京都大学、大阪大学、神戸大学などのトップ大学の施設を巡ります。

③学藝コースの生徒が企画・取材・執筆・撮影まで担当する「履正社中学校新聞」。本校の「言語技術教育」で育んだ「読む・聞く・話す・書く・考える」言葉の力を活かし、産経新聞社のご協力を得て作成しました。本校は、探究も言語技術の裏打ちがあってはじめて実のあるものになると考えています

④2010年から本校が開催している関西最大級の天体観測会「スターウォッチング」は、人工芝のグラウンドに30台近くの天体望遠鏡が並び、600名を超える地域の小学生や保護者が「夏の三大星」や「白鳥座のアルビレオ」、「土星の環」などを見つめる「星の夕べ」。運営に携わるのは、本校の教職員や理科部の生徒たちをはじめ、地域の天文同好会の方々や、卒業生を含む神戸大学天文研究会の学生たちです

探究とは、「考え方」を学ぶこと。

和田 履正社中学校でも今、探究が大きなテーマになっていますよね。

河本 そうですね。学藝コースを中心に、活動を取り入れています。たとえば「履正社中学校新聞」は、生徒たちがテーマを決め、取材から記事化まで取り組むという形で実施しました。

小林 生徒自身が「伝えたいこと」を見つけ、それを言語化する力が育ちますね。

河本 履正社の特色である「言語技術教育」も活かしています。自分の考えを論理的に構築し、表現できるようになる。それが探究の第一歩だと思います。

和田 私は、探究にはある程度の知識の蓄積も必要だと感じています。知識があってこそ、深く掘り下げて考えることができる。「探究のための探究」をさせることは避けたいですね。

小林 一方で、予想以上に生徒たちが面白いことがあるのも事実ですね。プレゼン大会などをやると、「学期ごとにやってほしい!」という声があがったり。クエスタカップや地域連携、キャリア学習など、段階を踏みながら自分の将来像を探るような内容を入れて、大学の総合型選抜入試にまでつなげるのが一般的な探究のあり方かなと思っています。

和田 私は、「探究」の時間もいいのですが、各教科の中でこそ探究学習を盛り込めたらいいなと考えています。社会には社会、理科には理科の探究の仕方、方法があると思うので。

河本 そうですね。私もよく「僕たちは『歴史で

学ぶ』をやりました」と言います。毎回、授業の冒頭にメインクエストの一つ、生徒たちに与えるんですが、たとえば「四千年前の人に何を手渡したら一番喜ぶと思う?」というような発問です。

小林 生徒たちの反応は?

河本 学習前の生徒たちは「スマホ」とか「車」とか、色々言います。根拠はあまりありません。ところが、学習後にもう一回同じ問いを投げかけると、「当時の人はこういう農業をしていたから、これを渡したら喜ぶに違いない」とか、「当時の都市はこういう都市だったから、これなら喜ばれるだろう」というふうになる。歴史的文脈を踏まえて、根拠を持って答えられるわけです。これが「歴史で学ぶ」という意味なんだよ、ということをやっています。

和田 「何を学ぶのか」ではなく、「社会科を通じてどのように考えるか」が本質ですね。

河本 そうですね。探究って、情報の入手方法や選び方・活用の仕方を学んで、実社会で役立つ思考力や問題解決力を養うこと。生徒たちには、自分の「考え方」を学ぶために社会を使ってくれたらいいし、それは中高一貫であるからこそできることでもあるのかなと。

すごく探究的で、素晴らしい授業。

小林 その際、どの程度の範囲の中で探究させるかという設定の仕方は、各先生の腕の見せ所

ですよ。それこそ知識も考え方も身につけていない生徒たちに、あまり自由にさせすぎても、何をやっていいかわからなくなるでしょう。

和田 小さい時の習い事も、親に色々チャレンジさせてもらったことをきっかけに、「もっとやりたい」という探究心が生まれることも多いと思うんです。ある程度、教員がテーマを持たせてあげることは大事なと思いますね。

河本 学校では、教科や科目自体がテーマでもあって、たとえば先日、体育の授業で生徒たちがワークシートを使って、「どうやったら速く走れるのか」というシンプルな問いに取り組んでいました。「速く走れる人はどのようにスタートしているか」「どんな角度で走っているか」「何歩で走ったか」などの観点がでていて、すごく探究的だなと思いましたね。客観的に自分を見て、他者の実践を見て、「どうすればよいのか」と問いを立てた上で、「こうかもしれない」と仮説を立てて検証する。素晴らしい授業でした。

和田 歴史で言うと、年号の語呂合わせなども探究的ですよ。暗記という壁を乗り越えるにあたって、どう工夫するか。

河本 自分で工夫して考えた語呂合わせは、くだけなくても一生忘れませんからね(笑)。

小林 本当にそう思います。最低限の知識があることはもちろんですが、そういう思考力を持って探究できる生徒さんたちに、ぜひ履正社の社会の試験を受けてほしい。そういう思いで、入試問題の準備を進めていきたいですね。